

竹取物語の物語性

——「月」をめぐる——

倪 錦丹

はじめに：

紫式部に「物語のいできはじめの祖」と評価された竹取物語の物語としての最も本質的な部分はどこにあるかという問題は従来の竹取論の重点である。柳田国男氏は「竹取物語の文芸としての目途」が五人の貴公子求婚譚にあり、それを「説話の変化部分、または自由区域」¹だと指摘した。また、津田左右吉氏も求婚難題説話の部分をも物語の根幹と認め、この物語が上流貴族への諷刺を旨としているのだという見解を示している。以上二つの意見をまとめて言い換えれば、求婚説話は基本的に竹取の虚構性及び現実性を語っているであろう。それに対して、和辻哲郎氏は竹取物語の羽衣説話の部分が伝説であり、一番浪漫的な香気に含まれているところだと論じている²。竹取における虚構性、現実性、浪漫性といった性質が竹取の物語たる由縁を語るものではなからうか。

一方、竹取には仏典や漢籍など外来の典籍から取り入れた素材がたくさんあるという指摘はすでに数多くなされてきた。伝承を通して、竹取の物語性が窺われることは上述のとおりであるが、作品の展開に窮まらない役割を果たしている漢文学がいかにも物語性の構築に役だっているかは十分に論じられて来なかったように思われる。現に、九世紀後半期から十世紀初頭にかけて平安物語文学の担い手を、渡辺秀夫氏は男性知識官人に措定し、彼らが「一方で先行する中国小説史の展開相を参照し」、それを日本の「歴史社会的条件下に検証しつつすぐれて精神史的問題を提起し、古代伝承的世界になお深くつながれながら、しかも伝承的奇異の円環を断ち切って、それらを批評的対象とし、個的な創作の具として再構成しうる精神を発見」したと論じている³。即ち、当時の男子知識官人は漢文の要素を汲み取り、自国の文学に新しい生命力を注ぎ、物語を生み出したのである。

渡辺氏の論に触発されながら、竹取における漢籍引用と物語性について考えてみたい。物語文学にとって、異郷という概念が常に重視されている。それが人間や人間世界の現実を相対的に捉え、その真相を深く凝視する視点になるからである。竹取においては、「月」はまさにその異郷であり、地上世界と端的に対

峙していながら、理想的な「月の都」である。本論では、しばしば漢文学にも登場する「月」の竹取における意味、働きなどを分析して、竹取の物語性を論じてみたいと思う。

一 月見の禁忌

まず、この物語に登場するかぐや姫と翁達の月に関するやりとりについて考察してみたいと思う。

春のはじめより、かぐや姫、月のおもしろういでたるを見て、つねよりも、物思ひたるさまなり。在る人の「①月の顔見るは、忌むこと」と制しけれども、ともすれば、人間にも、月を見ては、いみじく泣きたまふ。

七月十五日の月にいでて、せちに物思へる気色なり。近く使はるる人々、たけとりの翁に告げていはく、「かぐや姫、例も月をあはれがりたまへども、このごろとなりては、ただごとにもはべらざめり。いみじく思し嘆くことあるべし。よくよく見たてまつらせたまへ」といふを聞きて、かぐや姫にいふやう、「②なんでふ心地すれば、かく物を思ひたるさまにて月を見たまふぞ。うれしき世に」といふ。かぐや姫、「見れば、世間心細くあはれにはべる。なでふ物をか嘆きはべるべき」といふ。

かぐや姫の在る所にいたりて、見れば、なほ物思へる気色なり。これを見て、「あが仏、何事思ひたまふぞ。思すらむこと、何事ぞ」といへば、「思ふこともなし。物なむ心細くおぼゆる」といへば、翁、「③月な見たまひそ。これを見たまへば、物思す気色はあるぞ」といへば（省略）⁴。

下線部の翁達の発言に注目したい。①の部分に言う月見の禁忌は、平安文学にしばしば記載が見られ、土俗の民間信仰的なものが入り混じって、月を見るのは不吉という観念ができあがったろうという解説⁵もあるが、いかがであろうか。

月を見るのを忌む発想は、『万葉集』には見られず、『後撰集』（恋二・684 読人しらず）に「月をあはれといふは忌むなりといふ人のありければ 独り寝のわびしきままに起きるつつ月をあはれと忌みぞかねつる」⁶、また『源氏物語』宿木巻で老女房達が中の君

に言う言葉に「月見るは忌み待るものを」などがある。万葉人は月を見ることに對して何にも不吉に思わなかったが、平安に入ると急に文学の中俗諺のように言われるのは、やはり不思議に思われる。その発想は、日本古来のものかどうか疑わしい。

周知のように、白樂天の『白氏文集』は平安朝の貴族達に愛読され、それを模倣する傾向もかなりあったと言えよう。月見を忌むことは、土俗の信仰であるというより、むしろ『白氏文集』(卷十四「贈内」)の「月明に対して往事を思ふこと莫れ 君が顔色を損じ君が年を減ぜん」⁷の影響を受けた結果と見たほうが適切だと考えられる。『伊勢物語』88段を見てみよう。「むかし、いと若きにはあらぬ、これかれ友だちども集りて、月を見て、それがなかにひとり、大方は月をもめでじこれぞこの積れば人の老いとなるもの」⁸という歌を読んだ。その歌は在原業平の作と見られ、『古今集』にも収められている。これは、機知的に白詩を受容したもっとも代表的な例である。だから、平安朝の文学作品に出てきた月見の禁忌は、白詩の日本的な受容である可能性は否定できないであろう。

漢文に長ずる竹取の作者も白詩を知って、それを作品に取り汲んだのではないかと推測する。物語の中では俗諺のように言われており、月の世界と対立する地上の位相を示すことにはなっている。この月を忌む発想の介入によって、作者が海彼の新思潮への関心を示しながら、異郷と人間世界の対立をも際立たせたことと言えよう。

続いて、②と③の文句を見てみよう。翁はかぐや姫にこのすばらしい世の中に、どんな気持ちがあるから、そのように物思わしげな様子で、月を見るのかと聞いたが、かぐや姫は何もないと答えたから、翁は「それでは、月を見なさるな。これを御覧になると、どうも思い悩む様子がある」と言った。月を見ると、思わず物思いに耽ってしまう発想は先の月を忌むということを説明しているように読める。しかし、文学における月は普通に人々にどんな思いをさせるのであろうか。

最初に挙げたいのは白樂天の作として平安時代の日本人に愛読されていた次の漢詩である。「三五夜中新月色、二千里外故人心」⁹。月は人を思う情もひとしお募るものであり、十五夜の月の下に、白樂天は江陵(湖北省)に左遷された親友元稹のことを思い浮かんで、月に思いを託して、すばらしい詩句を詠んだ。

白氏が描いた大空に満ち輝く月光は悲しい空気に包まれていて、それを見ると心の奥まで懐旧や愁嘆の気持ちが溢れてくる。それに日本の文人たちが大いに共

鳴をし、『白氏文集』を好んでいた菅原道真はその詩には、「一生不見三秋月、天下応無腸断人」¹⁰と詠んでいる。月を見ると、人々は孤独感や寂寥感に苛まれ、思わず悲哀や述懐の感情が湧いてくるわけだ。

さらに、次の和歌を見てみよう。

——天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山にいでし月かも¹¹ (古今・羈旅・406)

この歌は阿倍仲麻呂の歌である。阿倍仲麻呂は周知のように、十六歳にして遣唐留学生として渡唐し、そのまま唐に仕えて秘書監になって、玄宗に大切視された人物であるが、在唐三十数年後に帰国した。この歌はその時、明州(浙江省境内)で詠んだ望郷の作である。これから見れば、月と羈旅・望郷・遠思の心は切っても切れない関係にある。そして、随筆『枕草子』の「成信中将は」という段には、「月の明かき見るばかり、ものの遠く思ひやられて、過ぎにしことの、憂かりしも、嬉しかりしも、をかしとおぼえしも、ただ今のようにおぼゆるをりやはある」¹²と述べた。『枕草子』が『白氏文集』に強く影響を受けたのは明らかである。同書の「ふみは文集、もんぜむ、ろんご、しきごだいほんぎ、ぐわんもん、はかせの申文」はそのことを証明していきよう。また、鎌倉初期の物語評論の書『無名草子』では、老女たちがこの世で第一に捨てがたいものは何かというテーマをめぐって、物語しているとき、ある人は「夏も、まして秋冬など月明かき夜は、そぞろなる心も澄み、情けなき姿も忘られて、知らぬ昔・今・行く先も、まだ見ぬ高麗・唐土も、残るところなく、遥かに思ひやらるることは、ただこの月に向かひてのみこそあれ」と言って、月の人にもたらず思いを切実に描写した。

以上からわかるように、漢詩においても、和歌や随筆などにおいても、月は切ないが、優美なイメージを持っている。月見をすると、遠くのことを思い出して、それは何ともいえないあわれなことである。

このように、竹取の作者は白詩における月見の禁忌と月見すれば物思いになる発想とを地上の秩序として随分機智的に見事に自らの作品に取り入れ、その上に月と地上の絶対的な離脱を前もって設定しながら、後の物語の悲劇的な展開にも伏線を敷いておく。物語の関心はあくまでも人間界に寄せられており、排除されるのは「月」である。この隔絶の発想はロマンチックな雰囲気富んでいながら、現実に立脚するという物語性を見出すことが出来よう。

二 月の都

かぐや姫が八月十五夜に月へ昇ることに、竹

取は羽衣説話を素材としておると考えられるため、姫が昇天するというのはほぼ定説となっている。しかし、昇天と「昇月」を同一視するのはふさわしくない。かぐや姫は漠然と天に昇るのではなく、月へ昇ったのだ。『丹後国風土記』の「奈具社」にせよ、『帝王編年紀』の「伊香小江」にせよ、或いは『今昔物語集』の竹取説話にせよ、いずれの説話に出てくる天人もただ昇天しただけ、月に昇る話は見られない。月を昇天先、または「月の都」として登場させたのは竹取以前にはないのだ。そういう変化は決して偶然だとはいえないと思う。

『古事記』などの日本神話によると、月はイザナキが黄泉の国から逃げ帰る途中、禊をし、右の目を洗ったところ、月読命を生んだ。また、『万葉集』には、「月読壮士」「月人壮士」を詠んだものが七、八首見られる。例えば、

天に坐す月読壮士賄はせむこよひの長さ五百夜継ぎこそ (985)

天橋も長くもがも 高山も高くもがも 月読の持てる変若水 い取り来て 君に奉りて 変若得てしかも (3245)¹³

いずれも月のことを一人の神として描かれている。

月は神そのものだという神話は日本に限る発想ではない。例えば、中国の『山海経』では、帝俊に妻が二人あり、一人は太陽を、もう一人は月を生んだという¹⁴。また、ギリシア神話に登場する太陽の神アポロの双子兄弟である月の女神アルテミスも一人の女性である¹⁵。これからみれば、洋の東西を問わず、古代神話において、月は神格そのものとして扱うのは一般的である。

ところが、『淮南子』¹⁶の覽冥訓に、「奔請不死之薬於西王母、姮娥竊之、奔月宮」と記載されている。また、『搜神記』の「月の精」にも同じような事が描かれている¹⁷。月の実体は神話時代と異なり、昇天先であり、天人の住んでいる空間となった。言い換えれば、月に対する捉え方は、神としての主体から神の存在場所としての客体へと転化したのである。月は主体から客体へと変容した。

竹取の作中人物にとって、もともと月の都は誰も憧れてやまない異界であった。その月の世界がいかなるものであるか、かぐや姫の口を借りて、読者達に伝える。「かの都の人」は、「いとけうらに、老いをせずなむ。思ふこともなく侍るなり」とあるように、不老不死の常世・神仙世界であり、天人が地上を「穢き所」と言うように、仏教思想に基づく浄土でもある。月世界は、複合的な理想郷となっている。

『淮南子』といい、竹取といい、中日両国とも起こったこの変化は、偶然だとは考えられない。神仙思想の興隆が背景となっていると巖紹壘先生は指摘している¹⁸。つまり、現実世界に不老不死を求めるのに無理を感じた方士たちは、視線を未知の世界に向け直さざるを得なかったのである。その結果、欠けては満ち、死と復活・再生の意味を持っていた月が仙境として嫦娥伝説などの神仙譚に登場したわけである。ついでに、もう一つ中国の伝承を挙げておく。「羅公遠多秘術、嘗与玄宗至月宮。初以拄杖向空擲之、化為大橋。自橋行十余里、精光奪目、寒氣侵人。至一大城、公遠曰、“此月宮也”。仙女数百、皆素練霓衣、舞於広庭、問其曲、曰“霓裳羽衣”、帝曉音律、因默記其音調爾還。回顧橋梁、隨歩爾没。明日召樂工、依其調作“霓裳羽衣曲”」¹⁹。立派な、仙女たちが住んでいる月宮は鮮やかに目に浮かんでくるような描写である。漢文に馴染み深い平安朝文人たちの一人である竹取の作者はあるいはそのような月宮のイメージを覚え、竹取における大切な「月の都」を作り、伝承説話の筋立てや趣向に寄り添いながら、物語の世界を語り進めたのではなからうか。

しかし、虚構されたロマンチックな「月の都」はあんなに理想的な世界であるにもかかわらず、罪のため月から地上へ流謫されたかぐや姫が「さる所（月の都）へまからむずるも、いみじくも侍らず」と言って、人間との心の通い合いに心を残し、もの思いのない月世界への帰還を喜ばない。かぐや姫が親の「老い衰へ給へるさまを」お世話してあげたい気持ちや帝に残す愛情深い手紙は読者に感動を呼び起こすであろう。普通の天人女房にはそういう情け深い心は決して見当たらない。『三宝絵序』の物語に関する論には、物語とは、「情ナキ物二情付ケ」ることだと記している²⁰。「月の都」の天人であるかぐや姫に人並みの愛情心を与え、それによって引き起こした感動こそ、文学的感動だと思ひ、ここから伝承説話とは別種の物語が生まれたのであろう。描写によって追求されるところの印象的な人生図が作り出されているのである。

三 中秋名月の伝来

八月十五夜、あの清冽たる名月を背景に、かぐや姫は華麗な行列に迎えられ、元の月世界へ帰ってしまい、物語は最高潮に達した。大曾根章介氏が述べたように、この物語のクライマックスは八月十五夜の月が大きな効果をあげている²¹。この中秋の名月はいかに竹取に物語性を与えるかはこの節で論じたいと思われる。

すでに一部の部分に触れたように、『万葉集』には、「月読壯士」「月人壯士」を詠んだ歌が七、八首見られる。その以外、月を詠む歌も数多くあるが、中秋の名月を詠む歌はまずない。『古今集』にも、そういう歌は見つからない。和歌世界では、中秋の名月を賞美するのは『後撰集』からであるが、『後撰集』には、八月十五夜の歌は二首しかない。

いつとても月みぬ秋はなきものをわきてこよひのめづらしきかな (325)

秋かぜにいとどふけゆく月影をたちなかくしそあまの河ぎり (336)²²

『後撰集』以後の勅撰集には、八月十五夜の月を題にした和歌がたくさん収めており、秋の歌として欠けない存在である。例えば、『拾遺集』巻三・秋の部に、「延喜御時、八月十五夜藏人所のをのこども月の宴し侍けるに、ここにだにひかりさやけき秋の月雲のうへこそおもひやられる (175)」²³と見える。

ところで、漢詩世界の場合はどうであろう。八月十五夜の月を賞することは島田忠臣の『田氏家集』²⁴に初めて見える²⁵。その家集の詩を掲げてみたい。

八月十五夜宴月²⁶ (巻上)

夜明如昼宴嘉賓 老兔寒蟾助主人 欲及露晞天向曙 未曾投轄滞銀輪²⁷

この漢詩からわかるように、文徳天皇の頃 (850-857) 日本の詩人達が中秋の夜に詩宴を開いていたのである。そして、貞観六年 (864)、道真の父親是善が『後漢書』を講義したのでその竟宴を兼ねた²⁸。島田忠臣の弟子でも婿でもある菅原道真の『菅家本草』四によると道真が讃州赴任中の十五夜詩に「菅家の故事は世人の知るところ、月を翫ぶこと今ために月期を忘る、茗葉の香湯もて酒を飲むことを免かれ、蓮華の妙法もて詩を吟ずるに換ふ」²⁹と詠んでいる。南海で喫茶誦経した感慨をうたっている言葉のおくに、菅家では代々同門弟子を集め、毎年中秋の日に観月の詩宴を催すのを恒例としたことが窺われる。

中秋の月は公的な場において賞玩されるようになるのは、寛平九年 (897) が最初である³⁰。これ以降、天皇や上皇の主催で、詩会や歌会などが華やかに行われるようになった。例を挙げてみると、『日本紀略』の延喜九年 (909)、閏八月十五日の条に、

夜、太上法皇 (宇多)、文人を亭子の院に召して、「月影秋池に浮かぶ」の詩を賦せしむ³¹。

以上から見れば、八月十五日に月を賞美するのは、必ずしも日本古来の風習とは言えず、竹取物語のクライマックスを現出する場面に、中秋の澄み切った月が選ばれたのは、古い習俗の記憶によるものではなく、

新奇な新思潮に寄せる憧れが働いていたのであると断定しても差し支えはないであろう。八月十五日に窮まる月の美しさと天人女房譚との結合は竹取独自のものだといってもいいであろう。川名淳子氏の指摘したように、「八月十五夜」にかぐや姫が本来棲もうべき月世界に帰ってゆくという流れは、竹取の独創的展開と見なされてもいい³²。

この独創的な展開はどんな働きを果たしたかという点、八月十五夜の場面設定によって、かぐや姫の「昇月」に纏わる離別の意味が歴然となる。「かの元の国」「かの都の人」と言ったかぐや姫はもう完全に地上の人間になって発言する。彼女は月の天人であったが、地上世界で長年過ごしていたから、人間界の生活にはすっかり慣れてしまい、月に帰ることは却って故郷を離れることになる。彼女にとって、むしろ地上世界のほうが自らの居場所だ。そこを永遠に立ち去っていくかぐや姫の悲しさは、あの郷愁を促す中秋名月の照らしの中に、一層痛切のものと感じられ、そして、地上世界に対する無限の愛着もあの光によって際なく表されている。

一方、翁たちにとって、そもそも人間の思いを乱す八月十五夜のすばらしい月光の中に、愛娘を失うのはもっと悲哀なこととなるのであろう。去る人と去られる人の愛別離苦は、中秋の月を昇天場面として意図的に設定したことによって、物語に一層切ない色彩を与えた。八月十五夜は団欒の夜だが、それはかぐや姫にとっても、翁達にとってもかえってつらい時期になってしまった。天人が昇天することは説話の伝奇性虚構性を受けつぐもので、実際には起こるはずがないが、大切な人を失う人間共通の切ない感情が潜んでいる。これはのちの『源氏物語』に証明される。紫の上は大病で、とうとう死んでいったが、その葬送は八月十五日に行われた。かぐや姫の「昇月」と紫の上の死とは、ある意味で同じであろう。益田勝美氏の指摘しているように、内容において、竹取のようなものから次第に説話抜き虚構へ移るのだ³³。

むすび：

竹取物語は、月から来た女性を「月の都」、「中秋名月」と結びつき、それによって、羽衣説話など日本在来の伝承説話から乖離した。中国から伝わってきた月に関する要素を導入することによって、天界と地上の衝突を問題にし、現実世界、人間世界を重視すべきだという自らの主題を提示したと思われる。従来の伝承世界は好んで草木鳥獣の変化や死霊・神様の話を語り、多くは単なる聞き書きの程度に過ぎないが、竹

取は「月」を対照に、人生そのものに視線を移り始めた。そこに竹取の物語性が現れてくるのではないかと思う。この「月」は、物語という新たな文学ジャンルを伝承説話から脱構築化させた一要素であると言える。

注

- 1 定本『柳田国男集』第六卷「竹取翁考」筑摩書房版 昭和38年
- 2 和辻哲郎は羽衣説話の部分をも物語の根幹と認め、したがってこの物語の性格を、「永遠美を幻想するお伽噺」と捉えて、単に伝奇的興味を主とするものから、人間無力観の文学と判断した。（『日本精神史研究』和辻哲郎 著 岩波書店 1992年）津田左右吉が和辻氏と対照的に求婚難題説話の部分をも物語の根幹と認め、従ってこの物語の性格を、「王朝世態小説」と把握し、上流貴族への諷刺を旨とするものから、反伝説的な写実性の確立を評価した。（『貴族文学の時代』『文学に現れたる我が国民思想の研究』津田左右吉 著 岩波書店 1966年）
- 3 『平安朝文学と漢文世界』421頁をご参照 渡辺秀夫 著 勉誠社 平成3年
- 4 本文の引用はすべて小学館の『新編日本古典文学全集』1994年によるものである。
- 5 『日本古典文学全集 竹取物語』の注釈17 小学館 1994年
- 6 『八大集抄』山岸徳平 編 有精堂 昭和35年
- 7 「漠漠蘭苔新雨地 微微涼露欲秋天 莫对月明思往事 損君顔色減君年」『白氏文集 三』卷十四「贈内」新釈漢文大系 岡村繁 著 明治書院 昭和63年
- 8 『伊勢物語』新潮社版 渡辺実 校注 昭和51年
- 9 「八月十五夜禁中独直 对月憶元九」銀台金闕夕沉沉、独宿相思在翰林。三五夜中新月色、二千里外故人心。渚宮東面煙波冷、浴殿西頭鐘漏深。猶恐清光不同見、江陵卑湿足秋陰。
- 10 『菅家文草 卷三・195』「秋天月」：千悶消亡千日醉、百愁安慰百花春。一生不見三秋月、天下応無腸断人。川口久雄 校注 岩波書店 1966年
- 11 空をふり仰ぎ見ると、春日にある三笠山に出た懐かしい月が浮かんでいるなあ。この歌は『八代集抄』山岸徳平 編 有精堂 昭和35年から引用した。
- 12 『枕草子』と『無名草子』の本文引用はすべて新潮社版古典集成（1977年）によるものである。
- 13 『万葉集』中西進 校注 講談社 1978年
- 14 『山海経』438頁「東南海之外、甘水之間、有羲和之国。有女子名曰羲和、方日浴於甘淵。羲和者、帝俊之妻、生十日」。463頁「有女子方浴月、帝俊妻常羲、生月十有二、此始浴之」。袁珂 校注 巴蜀書社 1996年
- 15 『希臘神話と伝説』斯威布 著 楚図南 訳 人民文

- 学出版社 2004年
- 16 新釈漢文大系54『淮南子 上』楠山春樹 著 明治書院 昭和54年
 - 17 羿は西王母から不死の仙薬をもらったが、妻の嫦娥がそれを盗んで月へ逃げようとした。いざ逃げ出そうというときに、嫦娥が有黄に吉凶を占ってもらおうと、有黄は筮竹を数えて、「吉だ。軽やかな婦妹、ただ一人西方へ旅立とうとしている。途中で天が真っ暗になっても、恐れたり驚いたりしてはならぬ。やがては大いに栄えるであろう」と言った。こうして嫦娥は、月に身を寄せたのであった。これが蟾蜍である。『搜神記』『月の精』干宝著 竹田晃訳 東洋文庫 平凡社
 - 18 『中日文化交流史大系 文学巻』严绍璽・中西進 主编 大修館書店 1995年
 - 19 『楽府詩集』卷56唐・王建「霓裳辞十首」引き「唐逸史」（宋）郭茂倩 編 中華書局 1979年
 - 20 『三宝絵』新古典日本文学大系 岩波書店 1997年
 - 21 「八月十五夜」『日本漢文学論集』第一卷 大曾根章介 著 汲古書院 平成10年
 - 22 『八大集抄』山岸徳平 編 有精堂 昭和35年
 - 23 同上。
 - 24 『田氏家集』は、文徳朝から五代、宇多朝初頭に至るまで仕えた官人島田忠臣の漢詩集である。
 - 25 「八月十五夜」『日本漢文学論集』第一卷 大曾根章介 著 汲古書院 平成10年
 - 26 『田氏家集全釈』中村璋八・島田伸一郎 著 汲古書院 平成4年 同書にあるほかの二首八月十五夜を詠ずる詩も紹介しておく。62「八月十五夜・惜月」月好偏憐是夜深、三更到晓可分陰。争教天柱当西峙、礙滞明光不肯沈。187「八月十五夜宴各言志」憐月情多暗数莫、逐光移坐最西亭。若令他夕如今夜、不惜明朝一芙蓉。
 - 27 月の光が昼のように明るいので賓客と宴の席にいる。老兔や寒蟾の住むという月が客をもてなして主人を助けてくれる。草に置く露も次第に乾いてきて夜も明けようとしている。昔からまだ誰もが車のくさびを井戸に投げ込んで銀の車輪（月）の帰るのを留めたことがないが、この美しい月を空に留めて置けないのは残念だ。
 - 28 新日本古典文学大系『本朝文粹 卷九・263 八月十五日嚴閣尚書授後漢書畢各詠史得黄憲 菅贈大相国』岩波書店 1992年
 - 29 『菅家文草四 八月十五日夜、思旧有感』「菅家故事世人知 翫月今為忌月期 茗葉香湯免飲酒 蓮華妙法換吟詩 如何露溢思親处 況復潮寒望闕時 從始南來長鬱悒 就中此夜不勝悲」川口久雄 校注 岩波書店 1966年
 - 30 『菅家文草』卷六「八月十五夜同賦秋月如珪应製」川口久雄校注岩波書店1966年
 - 31 『新訂増補国史大系 11』「日本紀略」14頁 吉川弘文館刊行 昭和40年
 - 32 「竹取物語——月界からの使者」川名淳子『国文学』2007年3月
 - 33 『益田勝美の仕事2 火山列島の思想』益田勝美著

鈴木日出男・天野紀代子編 筑摩書房2006年

げい きんたん／北京外国語大学 北京日本学研究センター 文学専攻2年